

地域連携・フロンティアセンター

2024（令和 6）年度実績報告

（フロンティアセンター創立 20 周年記念号）

目 次

I. 特集 フロンティアセンター創立 20 周年記念	1
1. 冒頭あいさつ	1
2. 寄稿 初代センター長 川嶋みどり先生	2
3. フロンティアセンター発足の経緯	4
II. 目的と運営	23
1. 目的	23
2. 組織運営	23
III. 事業	25
1. 地域連携委員会	25
1) 公開講座 / 誰でも学べる地域セミナー	25
2) ホームカミング・デー	27
3) 日赤広尾地域防災プロジェクト	29
4) 武蔵野地域防災活動	30
5) 日赤出張暮らしの保健室	31
2. 継続教育・実践研究委員会	32
1) 実習指導者研修会	32
2) フロンティアセミナー	38
3) 赤十字リサーチ・フェスタ	39
3. さいたま地域連携委員会	40
1) 大学コンソーシアムさいたま	40
2) UR 都市機構との連携	41
3) 埼玉県内における 2 つの赤十字病院の看護師への研究指導	42
4) 学内での活動の推進	43

I. 特集 フロンティアセンター創立 20 周年記念

1. 冒頭挨拶

2024(令和 6)年に、地域連携・フロンティアセンターの設立 10 年、そしてこのセンターの端緒である看護実践・教育・研究フロンティアセンター発足から 20 年という節目の年を迎えました。このことを記念して、2005 年(令和 7)年度初頭に発行いたします地域連携・フロンティアセンター実績報告書では、センター発足の経緯を振り返りながら、本センターが何を目指し活動していくのかをあらためて確認し、その歩みをさらに前へと進めていく機動力にしていきたいと考えました。

今回、本センターの礎を築られました、初代のフロンティアセンター長を務められた日本赤十字看護大学名誉教授川嶋みどり先生にお願いして、発足当時の状況など、本センターにとって貴重な遺産となりうる文章をご寄稿いただきました。あわせて、これまでの本センターの歩みの概略をまとめてみました。

この機会に、2024(令和 6)年度の日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター実績報告書をご高覧いただき、本学の社会貢献、地域連携活動のさらなる発展にむけて、皆様のご理解、支援賜りたく存じます。

2025 年 3 月 31 日

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター長
鷹野朋実

2. 寄稿 初代センター長 川嶋みどり先生

1つの軌跡を振り返る－看護実践・教育・研究フロンティアセンターの歩み

川嶋みどり

看護実践・教育・研究フロンティアセンターは、大学としての教育機能を、学内にとどめず、看護界並びに国内外の社会に貢献する資源として活用できるようにするという目的を掲げて創設されたが、その契機は、2004年12月のスマトラ沖地震とインド洋の大津波であった。赤十字救護事業のERU活動に参加した関助教授（当時）の現地での体験から、これまでの教育実践と成果を学内にとどめず、広く社会(国際)貢献をする必要を感じ、支援策に繋がりたいと考えたことから発想が広がったのであった。

10人前後の有志教員による白熱した討論によって、フロンティアセンター創設の扉を開くことになったのは、2005年のことであった。当時私は、在野生活30年余を含めて50年の経験を重ねてはいたが、大学教育では初心者であり教学に関する知識が浅いまま、新米の学部長という立場であったが、創設の音頭を取ることができたのも、旧来の慣習などを知らない立場であったからこそ実現した側面があったと思う。その時提示した構想案には、「大学として蓄積して来た知的・実践的ノウハウを整理し、人々に求められる看護の可能性を追求するために設置する」とあり、実践・教育・研究を柱にそれぞれ盛り沢山の項目が示されている。

なかでも、臨床における看護の質を高めることへの、大学としての貢献策の1つとしてかなりの精力を注ぎ、センター事業のメインとしたのが、2006年からの認定看護師研修課程であった。WOC、がん化学療法、感染管理の3コースで開始し、2011年からは感染管理、糖尿病看護、認知症看護、慢性呼吸疾患の4コースとなったが、多分1000名近くの修了生を送り出したのではないだろうか。学部教育や大学院教育を進める一方で、卒後の研修コースを維持運営することへの、教員たちの負担はかなり大きかったが、修了生たちの評価の高さによって苦勞が報われた感じがしたものである。

また、少子高齢社会の進行と社会経済状況の変化のもとで、ますます質の高い教育が求められる一方、私学として健全な経営維持は欠かせない課題であった。グンゼ株式会社との産学協同開発がセンターの主事業に位置づいたのも、そうした事情を抜きにはできない。女性に必需のアンダーウェアを姿勢と血流という視点から検証して商品化した“いきいき美人”グッズは、締め付け感のないサポータイヴなブラジャーとして、徐々に愛用者も増え一定の収益を上げたが、人件費や商品管理の設備費などを抜きであったため、3年間で事業を終結した。

また、訪問看護ステーションプロジェクト（医療センター、赤十字本社、本センター）により、2007年には、医療センター内に日本赤十字社広尾訪問看護ステーションを創設した。この他、フロンティアセミナー、市民公開講座の開催などにより、研究活動を通して得た知

見を社会共有の知識として学外にも発信する場を設けるなど、多彩な活動を推進したことも大学の社会・地域貢献に役立ったことを信じたい。



3. フロンティアセンター発足の経緯

2004(平成16)年12月22日、本学は看護フロンティアセンター構想委員会を立ち上げ、センターの設置を目指すこととなった。

1年弱の準備期間において、センターの組織は学部や大学院と並ぶ独立した組織とすること、発足のための予算として予備費から100万円を支出するが、その後の運営は助成金や収益事業によって独立採算で行うことが決まった。当初の名称「日本赤十字看護大学付属教育・研究・実践センター『看護フロンティア』」は、実践を重視する考えのもと「日本赤十字看護大学看護実践・教育・研究フロンティアセンター」と改められた。

2005(平成17)年8月1日には本学教授会にて、フロンティアセンター規程が承認され、正式にセンターが発足した。発足時のセンター長は川嶋みどり教授、企画・教育部長鶴田恵子教授、研究・開発部長河口てる子教授、看護実践部長守田美奈子教授、広報担当部門小宮敬子准教授(当時)であった。折しも日本赤十字武蔵野短期大学との統合の時期であり、新しいメンバーで新しい教育が始まるという雰囲気の中での出発だった。

初代川嶋センター長の後、2011(平成23)年度鶴田恵子教授、2014(平成26)年度守田美奈子教授、2015(平成27)年度鶴田恵子教授が就任した。

フロンティアセンターは、大学がこれまで蓄積してきた知的・実践的な活動をもとに、広く人々の心身の健康を維持し発展させていくために活用できる場とし、3つの理念、すなわち「1.生命の尊厳と人々の生きる権利を守る」「2.全人的なアプローチを通じて生命体の自然治癒力を高める」「3.人と人のつながりがもたらすパワーと資源を活かして、個人や社会が持つ自助能力を開発する」を通じて、人道とケアリングを基調とする新しい社会を創出することを目指した。また、実践・教育・研究の3つの部門のそれぞれに、市民、看護師、保健師、助産師他、看護教員や研究者を対象としたプログラムを準備した。

風を巻き起こすイメージのセンターのロゴマークが作成され、ホームページも開設された。

ロゴマーク

ロゴマークは風車をモチーフに、フロンティアの活動を通じて、社会に風を巻き起こす姿をイメージしている。

一人ひとりを大切にする社会、人と人とのつながりを通じて人々が元気になる社会を作りたいとの願いが込められている。



センターの事業は、社会貢献をしたいという教員の高い志と自由な発想に基づくものであった。主要な事業となった認定看護師教育課程は、2004(平成16)年5月、日本赤十字社の病院事業局看護部からの依頼により検討が開始されたもので、最初は日本赤十字社幹部看護師研修センターでの実施が検討されたが、病院職員のみでは採算がとれないため大

学で実施する運びとなった。当時、認定看護師資格に対するニーズは高く、日本看護協会でも研修施設の増加を望んでいたところで、本学では他大学に先駆けて同課程を発足させ、多数の修了生を輩出して、実践の場の看護ケアの質向上に貢献した。またその収益を 2005（平成 17）年の大学建物の改築にて必要となった自己資金に充てたこと、さらに余波として認定の課程をもつ大学の大学院が専門看護師の機関認定を受けなくてよいのかとの議論をまき起こし、本学大学院が専門看護師教育機関認定を受けるきっかけになったことにも触れておかなければならない。

実現したものにはスマトラ沖地震・津波被災者の中長期支援のためのニーズ調査（本社との共同事業）、健康な女性のプロポーションをサポートする「いきいき美人」（グンゼとの産学協同事業）などがある。訪問看護ステーションはフロンティアセンターの事業としては実施できなかったが日本赤十字社医療センター内に開設され、実現した。実現しなかったものにはバースセンターや献血バスの看護師による異動する看護相談室、介護予防に関するモデル事業、フィリピン看護師受け入れに伴う教育プログラムなどがあったが、その他多くの事業、研究活動に基づくさまざまな研修や講座が開催され、社会貢献を果たした。

またセンターの事業は、組織の枠を超えたところで生まれる柔軟性も大きな特徴であった。そうして生まれた活動の地道な継続を通じて築かれた関係機関・団体との協力関係が、現在のフロンティア事業や大学の教育研究活動の基盤にもなっている。

2015（平成 27）年の大学の組織改革の中で、本センターにはその活動の中心に地域連携を据えることを求められたことから、地域連携委員会と統合され、地域連携・フロンティアセンターとなった。これからのセンターには、より一層柔軟で創造的な活動が期待されている。

2. フロンティアセンター事業

2015（平成 27）年、地域連携・フロンティアセンターの活動は、研修部門、研究・実践部門（地域連携部門）災害看護部門に大別され、部門長を中心に企画案をたて、フロンティアセンター運営委員会において検討し、全学的な協力を得て運営している。自主財源で事業活動を行っているため、専従の事務職はおかず、大学事務局が兼担している。フロンティアセンターは、学内外から提起される課題に対し、組織として迅速かつ柔軟に対応できることが特徴であり、実践・研究・教育に関する課題に対し初動対応、体制づくりを行う、まさに開拓者としての役割を担っている。

1) 研修部門

(1) 認定看護師教育課程

2006（平成 18）年 5 月より認定看護師教育課程を開始し、2014（平成 26）年 3 月までの 9 年間で 866 名の修了生、及び 862 名の認定看護師を輩出した（表 1）。

認定看護師は、特定の看護分野において熟練した技術と知識を備えた質の高い看護実践

能力を備え、医療・看護の向上を図りうる看護師である。開講当初は、「感染管理」「皮膚・排泄ケア」「がん化学療法看護」の3分野（各分野30名定員）からスタートした。「皮膚・排泄ケア」「がん化学療法看護」の2分野は5年間、「感染管理」コースは7年間、教育課程を開講した。2011（平成23）年度からは、新たに「認知症看護」「糖尿病看護」「慢性呼吸器疾患看護」の3分野を開講し、これらのコースは4年間開講し、2015（平成27）年3月で全コースを閉講した。

開講当初は広尾キャンパス（旧大学建物の4階・5階）で開講していたが、2010（平成22）年より武蔵野キャンパスに移転した。6月～11月の半年間の開講で、運営にあたっては、主任教員、事務職員は大学の教職員が兼任で担当した。各コースの専任教員は、全国赤十字病院から認定看護師の資格を有する看護師の派遣を得た。本フロンティアセンターの教育課程を修了した看護師が後に専任教員として活躍することもあり、本センターの人道を中心に据えた教育理念が継承されていることが実感された。

入学生は、全国の赤十字病院に所属する看護師のみならず、赤十字外の施設に所属する看護師の入学者も多かった。入学した研修生は4ヶ月余の講義および演習を経て、2カ月間の実習を行い、厳しい研修を経て、修了試験に合格した者が修了することができた。

研修生の実習は全国の赤十字病院あるいは各分野の専門病院の指導者、教職員のサポートを受けながら行われた。

11月末に修了式を迎える修了生は、翌年5月までの半年間、勤務しながら認定看護師認定審査試験の合格を目指した受験勉強を行うことになるため、本センターは、その支援として毎年3月にフォローアップ研修を行い、認定模擬試験や講演会等を開催し、合格率の向上に努めた。苦楽を共にした研修生および教職員は、分野を越えた絆が形成され、閉講後もネットワークの広がりや、実践、教育、研究活動の財産となっている。



表1 2006（平成18）年度～2014（平成26）年度 認定看護師教育課程入学生及び修了生数

（人）

コース名		平成 18年度	平成 19年度	平成 20年度	平成 21年度	平成 22年度	平成 23年度	平成 24年度	平成 25年度	平成 26年度	合計	認定看護師 人数
感染管理	入学者数	32	31	29	29	31	32	30			214	213
	（うち赤十字）	25	14	11	8	12	6	4			80	
	修了者数	32	31	27	30	32	32	29			213	
皮膚・排泄 ケア	入学者数	32	33	32	30	31					158	152
	（うち赤十字）	13	10	15	7	15					60	
	修了者数	31	32	31	28	31					153	
がん化学療 法看護	入学者数	33	30	33	33	33					162	159
	（うち赤十字）	16	4	16	15	10					61	
	修了者数	30	33	33	33	32					161	
糖尿病看護	入学者数						30	30	30	28	118	117
	（うち赤十字）						9	11	6	5	31	
	修了者数						28	32	30	27	117	
認知症看護	入学者数						31	30	30	29	120	112
	（うち赤十字）						16	10	10	5	41	
	修了者数						25	31	28	28	112	
慢性呼吸器 疾患看護	入学者数						32	29	28	23	112	109
	（うち赤十字）						9	5	4	4	22	
	修了者数						30	29	28	23	110	
全コース （合計）	入学者数	97	94	94	92	95	125	119	88	80	884	862
	（うち赤十字）	54	28	42	30	37	40	30	20	14	295	
	修了者数	93	96	91	91	95	115	121	86	78	866	

（2）フロンティアセミナー部会

フロンティアセミナーは、本学の特色ある研究や教育の成果を、医療施設・教育機関関係者等に提供し、専門職者のスキル向上を支援することをねらいとしたものである。2006（平成18）年より、継続的に開催してきた（表2）。

2013（平成25）年度から2015（平成27）年度の3年間は看護師の人材育成に関するテーマを取り扱い、看護の基礎教育機関と卒後の医療機関の教育との連携、人材交流、人材育成についてのテーマで開催した。効率化、高度化する医療現場においてどのように看護職の人材育成を行っていくか、特に現代の若者の特性を踏まえた看護学生、新人看護師教育における教育機関と医療機関とのパートナーシップの構築は不可欠である。

ワークショップでは活発な意見交換、情報交換が行われた。

フロンティアセミナーの企画、特にどのようなテーマを設定するかが重要であり、今日の



フロンティアセミナー（2014年12月13日）

課題を見据えながらもフロンティアとして先駆的なテーマを模索し、参加者とともに学ぶ機会としている。

(3) スキルアップセミナー部会

認定看護師修了生への継続的支援のニーズの重要性が考慮され、修了生のフォローアップを行う意味合いから「スキルアップセミナー」を2009（平成21）年度より企画し、開催している。毎年、本センター認定看護師教育課程修了生のみならず、外部教育機関を修了した認定看護師も数多く参加し、継続教育に対するニーズの高さを示すものとなっている。



スキルアップセミナー（2015年2月27日）

(4) 実習指導者研修部会

2013・2014（平成25・26）年度の2年間にわたり、本学実習委員会と日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、横浜市立みなと赤十字病院、葛飾赤十字産院のメンバーが企画委員となり、赤十字の理念を基盤とした「ケアしケアされる」体験をすることの大切さや本学の実習目的を反映させた、特色のある実習指導者研修会に研究的に取り組んできた。その教育効果が認められ、実習指導者研修会が2015（平成27）年度から「地域連携・フロンティアセンター」による事業となった。2015（平成27）年度は合計5日間の研修を大学で開催し、参加者は49名であった。

参加者から寄せられたキャリア形成に関する継続教育の要望に対し、フロンティアセミナーで行ってきた「現任教育」と連動させ共同企画として開催するなどフロンティアセンターの目的に沿った活動が今後も展開されていく予定である。

2) 地域連携部門

2012（平成24）年度に、広尾地域にある日本赤十字看護大学と日本赤十字社医療センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社医療センター附属乳児院、日本赤十字社幹部看護師研修センターが連携し、研究、教育、実践がリンクして広尾地域全体に寄与するシステム「ケアリング・フロンティア広尾」を立ち上げた。2013（平成25）年度

より本格的に活動を展開し、年3回の連携会議、各プロジェクト活動を展開している。2015（平成27）年度の時点ではリサーチ・フェスタ（写真）をはじめとする8つのプロジェクトが立ち上がっている（表3）。このプロジェクトは、病院、大学、福祉施設の看護職が共に活動することで、実践と研究、教育の連携を強め、看護実践の向上に貢献できる方向を目指している。



リサーチ・フェスタ(2014 年 7 月 3 日)

表3 ケアリング・フロンティア広尾プロジェクト事業一覧

	名称	ねらい
フェスタ	リサーチフェスタ	日本赤十字看護大学と近隣の赤十字病院は、実習・教育などを通して、ネットワークをもっている。このネットワークをさらに発展させることをめざし、赤十字リサーチフェスタでは、関心領域が近い医療職者と研究者が協働研究を行うきっかけをつくることをねらいとする。
	秋フェスタ	日赤から発信するイベントを通して地域貢献を図ることを目的とする。地域との連携を図りながら、看護の強みを活かした地域貢献の在り方を模索していく。
実践	My Turn（私の出番！）プロジェクト	日本赤十字看護大学周辺に在住し、人生経験の豊富な65歳以上の住民と看護を学ぶ多くの若者とお互いに交流する場をつくることを目的とする。
	高齢者の終末期ケアに関するプロジェクト	高齢者の終末期の定義、終末期のケアの構造が不明確な状態の中、病院、施設、在宅で高齢者の看取りをどのように行っていくのか、そのケアシステムを構築することを目的とする。 1) 平成26年度:コアメンバーにより終末期にある高齢者やその家族へのケアで直面する課題について話し合う。 2) 平成27年度:コアメンバーの話し合いを踏まえて、終末期にある高齢者やその家族のケアに携わっているスタッフが直面している課題について明らかにする。 3) 平成28年度:コアメンバー、スタッフ等の話し合いの結果を踏まえ、終末期にある高齢者とその家族へのケア（連携も含めて）について具体的なプログラムを立ち上げ、実施する。
	広尾地域防災プロジェクト HiCaDip(Hiroo Campus Disaster Prevention) Project	災害発生時に広尾キャンパス内の各組織、および共同体として、社会に期待される役割を果たすための態勢づくりを支援する。 1) 広尾キャンパス内における各施設の自助・共助の強化 2) 医療救護:救命・救急 3) 災害時要援護者の安全確保 4) 帰宅困難者の保護 5.) 防災・減災に強い組織づくりと人材育成 各施設の自助、共助の役割を明確にし、さらに三施設の防災上の連携・協働を構築する防災態勢をつくりあげていくことを支援する。
研究	TRC研究会(Total Renal Care)	個々の患者に最適な全人的総合的腎不全医療(包括的腎不全医療:Total Renal Care:TRC)の推進・普及を目指す。 「学は分野横断的」、「実践は地域一体型」という理念のもとに、学と実践の有機的交流を通じた、新たな腎不全医療モデルの創造を目的とする。
	セルフケア能力を高める支援の検討会 (SCAQ研究会)	入院一外来通院一在宅療養を視野に入れ、一人ひとりの生活を視野に入れたセルフケア支援を展開することをめざす。志を同じくする仲間を募り、広尾地区の赤十字から、セルフケア支援を世の中に向けて発信していくことを目的とする。

3) 災害看護部門

(1) 武蔵野地域防災活動部会

武蔵野市における地域防災活動は、日本赤十字武蔵野短期大学で2004（平成16）年より始められた。日本赤十字看護大学との統合後も継続され、2015（平成27）年度で12年目を迎えた。地域の人々とともに身近な防災の知恵と技を獲得し、災害に強い人材を育成することをねらいとし、武蔵野キャンパスを中心に武蔵野市民防災協会、行政と協働し、年間約10

回（例年 10 月から 2 月）の防災ボランティアセミナーを開催してきた。

セミナーの参加延人数は地域住民および本学学生を合わせ、4,500 名となる。長年にわたる地域防災活動への貢献に対し、2014（平成 24）年 1 月には、東京防災救急協会より防火防災功労賞、同年 11 月には武蔵野消防署より感謝状の表彰を受けた。

セミナー開催に伴う運営経費は、本学と武蔵野市とで拠出し、企画メンバーは本学教員、地域の自主防災組織所属の住民、赤十字社員、企業員、大学教員、近隣の病院所属看護師と多岐にわたる。本学の学生災害救護ボランティアサークルもメンバーとして一緒に企画運営に加わり、住民と共に地域防災に関する学習や交流に取り組んでいることが特徴である。

また、これまでの活動実績から、本学と武蔵野市との地域防災に関する協定が 2015（平成 27）年度締結した。この活動は、武蔵野キャンパスおよび武蔵野市民防災協会を会場としてきたが、武蔵野キャンパスの解体に伴い、武蔵野キャンパスでの開催は 2015（平成 27）年度で最後となった。

2014（平成 26）年度からケアリング・フロンティアのプロジェクトとして立ち上げた広尾地域防災プロジェクトは、武蔵野地域防災活動をモデルとしており、広尾キャンパス 6 施設（大学、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社幹部看護師研修センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院）と地域住民、渋谷区、大学周辺の町内会、消防、警察、医師会等との連携をすすめている。2015（平成 27）年度には、地域防災セミナーを開催し、地域防災マップの作成を通して身近な場所の危険などを理解するとともに、災害時におけるそれぞれの組織の役割内容の明確化が必要であることが確認できた。今後も連携を強めていくことになっている。



武蔵野地域防災セミナー 2015 年 1 月 26 日



広尾地域プロジェクト 2015 年 7 月 11 日

（2）浪江プロジェクト

本事業は、2011（平成 23）年 3 月 11 日に発生した東日本大震災に伴う東京電力福島原子力災害非難区域に居住する人々を対象とするものである。本学が浪江町と契約を結び、「いわき市内に避難している浪江町民に対する健康調査事業」として、2012（平成 24）年

らかな疾患や障害があり、支援が必要と判断される人など、多様性が広がっていることが明らかになっている。

この活動が特に顕著であったとして、2014（平成 26）年 8 月に厚生労働大臣より感謝状の表彰を受けた。東日本大震災における被災者の支援活動等に対する厚生労働大臣の感謝状は、被災地住民の生命及び健康保持、生活衛生の確保のため、人的、物的な支援活動を行った団体等が対象となる。本活動については、福島県の推薦によって受賞となった。



ママサロン



大学教員によるサロン



家庭訪問の様子



ヨガサロン

（３）災害看護・支援活動情報収集

東日本大震災の復興に向けて、本学教職員、学生が様々な支援活動を展開してきた。本センターでは、それら活動実績の収集および情報の発信を行い、支援している。2011（平成 23）年度延 29 名、2012（平成 24）年度延 51 名、2013（平成 25）年度延 47 名、2014（平成 26）年度延 48 名、2015（平成 27）年度延 46 名の教職員および学生災害救護ボランティアサークル（SKV）が参加し、活動している。

4) 旧フロンティアセンター事業

(1) 産学共同事業

2005（平成17）年1月に川嶋みどり（現日本赤十字看護大学名誉教授）とグンゼ株式会社との共同開発商品、健康ブラジャー「いきいき（販売当初は「血行」）美人」について販売を開始した。いきいき美人は、血流を促進することにより衰えた大胸筋と三角筋をリフトアップすることを目的とし、小胸の下動・静脈および神経の圧迫を減らす構造により筋肉への血流量が増える効果をねらいとしたものであった。看護系学会等の企業展示ブースに出展し、教職員が販売促進に関わった。関連商品として、ソックスやケープを含め、2007（平成19）年度末まで販売した。



いきいき美人販売ブース
(オープンキャンパスにて 2007年7月31日)

(2) 新人看護師をサポートする会

新人看護師の職場適応や離職防止を意図して、2009（平成21）年度から2014（平成26）年度まで「新人看護師をサポートする会」を開催してきた。当初は、4月～5月の平日夕方に開催していたが、就職直後の職場の状況等を考慮し、より参加しやすい時期を検討し、2013（平成25）年度からは6月初旬の大学祭開催時のホームカミングデーと合わせ、「新人看護師の集い」を企画した。参加者は十数名であるが、再会した仲間同士が、各々の勤務状況や、所属施設等の様子を話しながら、業務の忙しさや新人の大変さを共有し、母校で仲間や教職員とリラックスした時間を持つ機会となっていた。

表2 フロンティアセミナー・スキルアップセミナーテーマ一覧

年度	開催日時	テーマ	講師・シンポジスト
2006 (平成18) 年度	4月16日(日) 10:00～15:00	キネステティックの概念とその実際	ハイジ・パウダー・ミスバッハ女史 Heidi Bauder Missbach
	4月17日(月) 10:00～16:00	キネステティックの看護への応用	
	8月4日(水) 13:30～16:30	トークセッション「体験としての治療共同体－集団精神療法の40年－」	鈴木純一(川越同仁会病院院長)
2007 (平成19) 年度	11月23日(金) 13:00～17:00	「自然治癒力と看護－IT時代のケアを求めて－」	川嶋みどり(日本赤十字看護大学 学部長)
		統合医療と看護への期待	渥美和彦(日本統合医療学会・JACT 理事長 東京大学名誉教授)
		触れる、聴く、語る	武井麻子(日本赤十字看護大学大学院 看護学研究科 研究科長)
		看護の力を発揮する－今がその時	がん患者・家族の生きる力を支えるための看護－がんサポーターチームの研究活動から
		ホリスティックなケアの普及のために	守田美奈子(日本赤十字看護大学 教授)
2008 (平成20) 年度	8月5日(火)・ 6日(水) 10:00～16:00	臨床実践能力スキルアッププログラム「心に触れる手のわざ」	鶴田恵子 (日本赤十字看護大学 教授)
			「『手のわざ』を究める」
			川嶋みどり (日本赤十字看護大学 学部長)
2009 (平成21) 年度	12月5日(土) 11:00～16:30	臨床看護師のためのスキルアップセミナー	伊藤直榮(日本工学院専門学校 医療力レッジ 顧問)
			「呼吸を楽にする手のわざ～指と手のひらで呼吸苦を和らげ無気肺を防ぐ～」
			「食事は生きること～嚥下障害と向き合った30年のわざの結晶から～」
			田中靖代 (ナースホーム 気の里 施設長)
2010 (平成22) 年度	11月23日(火) 13:00～16:30	人間が人間をケアすること	認定看護師の動向
			洪 愛子(日本看護協会 常任理事)
			新型インフルエンザ(H1N1)と公衆衛生的対応
			和田耕治(北里大学医学部衛生学公衆衛生学)
2010 (平成22) 年度	11月27日(土) 11:00～16:30	臨床看護師のためのスキルアップセミナー	失禁ケアに必要な最新のアセスメント～そのオムツ本当に必要ですか～
			谷口珠実 (日本コンチネンス協会 理事)
			最新のがん化学療法の動向
			中根 実(武蔵野赤十字病院: 血液腫瘍内科副部長)
			ナイチンゲールを超える現代看護の課題
2010 (平成22) 年度	11月27日(土) 11:00～16:30	臨床看護師のためのスキルアップセミナー	川嶋みどり (日本赤十字看護大学 教授)
			現代に生きるナイチンゲール 思想と実践
			川原由佳里 (日本赤十字看護大学 准教授)
			田中靖代(ナースホーム 気の里 施設長)
			川嶋みどり (日本赤十字看護大学 教授)
2010 (平成22) 年度	11月27日(土) 11:00～16:30	臨床看護師のためのスキルアップセミナー	認定看護師の活用－看護管理者の立場から
			福井トシ子 (日本看護協会 常任理事)
			環境清掃の再考
2010 (平成22) 年度	11月27日(土) 11:00～16:30	臨床看護師のためのスキルアップセミナー	古田信弘((株)メディカル・マネジメント・サポート代表取締役)
			局所陰圧閉鎖療法の実際
2010 (平成22) 年度	11月27日(土) 11:00～16:30	臨床看護師のためのスキルアップセミナー	西出 薫(KCI株式会社 学術本部 教育部長)

年度	開催日時	テーマ		講師・シンポジスト
2010 (平成22) 年度	11月27日(土) 11:00～16:30	臨床看護師のための スキルアップセミナー	多職種間のコミュニケーション ～ ファシリテーションの基本を学ぼう～	堀 公俊 (日本ファシリテーション協会 会長)
2011 (平成23) 年度	11月26日(土) 11:00～16:30	臨床看護師のための スキルアップセミナー	特定看護師(仮称)～これまでの 経緯	鶴田恵子 (日本赤十字看護大学 教授)
			災害時における感染症の現状と 対策	加来浩器(防衛医学研究センター)
			皮膚・排泄ケア領域における災害 対応ー現場の実際と支援ー	星野宏光(日本ストーマ用品協会:コ ロプラスト株式会社)
			がん化学療法Update	中根 実(武蔵野赤十字病院)
2012 (平成24) 年度	12月8日(土) 11:00～15:30	臨床看護師のための スキルアップセミナー	Up to date ー洗浄・消毒・滅菌 における今と課題 そしてICNはど う実践するか！ー	齊藤祐平(東京大学医学部附属病院 手術部)
			2012年 診療報酬改定後の解釈 とそのポイントー皮膚・排泄ケア 領域のポイントー	高水 勝(3Mヘルスケア)
			分子標的薬アップデート	藤田直也(がん研究会がん化学療法 センター基礎研究部長)
2013 (平成25) 年度	2014 (平成26)年 3月8日(土) 13:00～16:00	シームレスな人材育 成をデザインする ～ 新人看護師をめぐる 大学と病院のパート ナーシップ～	大学と企業によるパートナーシップ	谷 正史(金沢工業大学 常任理事 産学連携推進部長)
			新人看護師育成に向けた大学と 病院のパートナーシップ	小野和代(東京医科歯科大学附属病 院 副看護部長)
				早尾弘子助教(東京医科歯科大学 キャリア支援管理部門 特認助教)
				別府千恵 (北里大学病院副院長・看護部長)
				黒田裕子(北里大学看護学部長)
2014 (平成26) 年度	12月13日(土) 13:00～16:00	シームレスな人材育成 をデザインするPartⅡ ～看護師の現任教育 における大学と病院の パートナーシップ～	「看護師に対して教育的かわり ができる人材の育成・支援につい て」	佐々木幾美 (日本赤十字看護大学 教授) 泊瀬川紀子(日本医科大学武蔵小杉病 院副看護部長) 福家幸子(虎の門病院看護部次長)
2015 (平成27) 年度	12月19日(土) 13:00～16:00	シームレスな人材育 成をデザインする PartⅢ ～現場で教 育に関わる看護職者 育成における大学と 病院の協働～	現場で教育に関わる看護職者育 成における大学と病院の協働	佐々木幾美 (日本赤十字看護大学 教授)
			急性期病院における『高齢者看 護コース』立案上の課題	窪田裕子(日本医科大学武蔵小杉病 院 認知症看護認定看護師)
			急性期病院における『高齢者看 護コース』立案への大学の支援	坂口千鶴 (日本赤十字看護大学 教授)
2015 (平成27) 年度	平成28年2月27 日(土)11:00～ 15:30	認定看護師のための スキルアップセミナー	看護が誘導する新たな病院文 化ー安全性と安楽性(尊厳)の両 立ー	川嶋みどり (日本赤十字看護大学 名誉教授)
			糖尿病看護のこれから～私たち 認定看護師に求められていること	河口てる子(日本赤十字北海道看護 大学 学長)
			COPDの身体的活動維持のため の包括的呼吸リハビリテーション	武知由佳子 (いきいきクリニック 院長)
			認知症看護における急性期病院 と地域との連携・課題について	小栗智美(日本医科大学付属病院 老人看護専門看護師)

年度	開催日時	テーマ	講師・シンポジスト
2016 (平成28) 年度	11月30日(土) 13:30～16:00	看護を担う人材育成 をデザインする ～実習指導者研修会 の学びを発展させて ～	「教える」を超えた「学び合い」の実現へ ～現場で他者の成長を支援する人の役割～
			西田朋子(日本赤十字看護大学看護教育学 准教授)
			「実習指導者研修会の学びを実践に活かす ～経験の意味づけを大切にしたい関わりを目指して～」
	2017 (平成29)年 2月25日(土) 10:30～15:30	認定看護師のための スキルアップセミナー	城下 香(横浜市立みなと赤十字病院)
			「学生指導って楽しい！ ～学生指導を通じた学びと理想～」
			渡邊友里恵(葛飾赤十字産院)
			「ひと相手の仕事はなぜ疲れるのかー感情労働の視点からー」
2017 (平成29) 年度	12月2日(土) 13:30～16:30	看護へキャリアチェンジした人とともに さまざまな背景を持つ看護職者により豊かな組織を作る	武井麻子(日本赤十字看護大学 名誉教授)
			「スタッフ教育～糖尿病看護の楽しさ・やりがい伝えるために～」
			安酸史子(防衛医科大学学校教育看護学科教授)
			「慢性呼吸器疾患患者の退院支援と診療報酬」
			松本明子 (聖路加国際病院相談・支援センター療養サポート室)
	2018 (平成30)年 2月24日(土) 9:30～15:30	認定看護師のための スキルアップセミナー	「ケアの受け手の尊厳を守るために認定看護師が果たす役割」
			藤原 麻由礼(総合病院 厚生中央病院)
			「看護へキャリアチェンジをした人とともに」
			樋口 由紀子(日本赤十字社医療センター GCU 助産師)
			「看護師にキャリアチェンジしてみて ～看護師7年目のわたし～」
			武田 紀子 (東京都立府中療育センター 看護師)
			「看護へキャリアチェンジした人を支援する心得～経験を通して学んだ「ギャップ」と「キャリア」を理解することの大切さ～」
2018 (平成30) 年度	2019 (平成31)年 2月23日(土) 10:00～16:20	認定看護師のための スキルアップセミナー	須崎 大 (済生会横浜市東部病院 救命救急センター 外来看護師長)
			「背景が多様な看護職員と共に、豊かな組織を作るために」
			西田朋子(日本赤十字看護大学看護教育学 准教授)
			看護現場の今を改善するためにー認定看護師に求めたいことー
			川嶋みどり(日本赤十字看護大学 名誉教授)
			「2025年の地域包括ケアシステムに向けて地域連携を進める中で糖尿病看護認定看護師の役割やリーダーシップについて」
			数間恵子(元東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻教授)
			「慢性呼吸器疾患患者のACPを考える」
			吉澤孝之(要町病院 院長)
			「高齢者の思いを支える看護」
2018 (平成30) 年度	2019 (平成31)年 2月23日(土) 10:00～16:20	認定看護師のための スキルアップセミナー	坂口千鶴(日本赤十字看護大学 教授)
			「認定看護師の感情労働」講義とワークショップ
			武井麻子 (日本赤十字看護大学 名誉教授)
			「トークセッション」 みんなで語ろう 「認定看護師のアイデンティティを揺るがすもの」
			高田早苗(日本赤十字看護大学 教授) 川嶋みどり (日本赤十字看護大学名誉教授)
2018 (平成30) 年度	2019 (平成31)年 2月23日(土) 10:00～16:20	認定看護師のための スキルアップセミナー	「パネルディスカッション」 「今、改めて問い直そう！」ー認定看護師に期待されていること、できることー
			川嶋みどり (日本赤十字看護大学名誉教授) 江見香月(日本赤十字看護大学) 村田 中(武蔵野赤十字病院糖尿病看護認定看護師)
			「特別講義」 「認知症の人を知り、共に生きる」
2018 (平成30) 年度	2019 (平成31)年 2月23日(土) 10:00～16:20	認定看護師のための スキルアップセミナー	太田喜久子(日本赤十字看護大学)

2018 (平成30) 年度	2019 (平成31)年 2月23日(土) 10:00～16:20	認定看護師のための スキルアップセミナー	[講義] 「人から人、そして地域へ」	高木あけみ(原町赤十字病院糖尿病看護認定看護師)
	[特別セミナー] 「高齢者の睡眠の特徴と睡眠マネジメント」		臼杵礼司((社)日本睡眠教育機構認定睡眠健康指導士)	
	[公募企画ワークショップ]			
	2019 (平成31)年 3月21日 (木・祝) 13:30～15:30		理論を看護実践にどのように活かすか	筒井真優美 (日本赤十字看護大学 名誉教授)
2019 (平成31) 年度	11月2日(土) 13:00～17:00	チャレンジ！看護研究 ～はじめの一歩～		
			講演Ⅰ 日頃の疑問から研究テーマへ	太田喜久子(日本赤十字看護大学教授)
			講演Ⅱ 実践家の強みをいかすアクションリサーチ ～人々とともに、人々のためにある研究方法～	筒井真優美 (日本赤十字看護大学 名誉教授)
2019 (平成31) (令和元) 年度	※2019年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため延期 令和2年10月10日(土)開催予定			
	令和2年2月 29日(土)	認定看護師のための スキルアップセミナー	<基調講演> 「認定看護師に求められる教育力」	佐々木幾美(日本赤十字看護大学教授)
			<シンポジウム> 「あらためて看護の初心を ～多職種から考える看護の独自性～」	川嶋みどり (日本赤十字看護大学 名誉教授) 呉 聖満 (片麻痺根本再生治療院 院長) 本間之夫 (日本赤十字社医療センター院長)
2020 (令和2) 年度	10月10日(土) 13:00～17:00 Web開催 ライブ配信	認定看護師のための スキルアップセミナー	<基調講演> 「認定看護師に求められる教育力」	佐々木幾美(日本赤十字看護大学教授)
			<シンポジウム> 「あらためて看護の初心を ～多職種から考える看護の独自性～」	川嶋みどり (日本赤十字看護大学 名誉教授) 本間之夫(日本赤十字社医療センター院長)
	11月7日(土) 13:00～14:40 web開催 ライブ配信	チャレンジ！看護研究 Part2	私でもできる、量的研究	遠藤公久(日本赤十字看護大学教授)
	2011 (令和3)年 2月27日(土) 13:00～17:00 web開催 ライブ配信	認定看護師のための スキルアップセミナー “知ろう” “備えよう” —新型コロナウイルス 感染症禍の看護—	<講演> 災害時の要配慮者とCOVID-19	内木美恵(日本赤十字看護大学准教授)
			<テーマセッション> 「新型コロナウイルスに対する医療従事者のメンタルヘルスケア」	杉原玄一 (東京医科歯科大学准教授・精神科医師)
			「医療者のメンタルヘルス —COVID-19の蔓延する世界で—」	武井麻子 (日本赤十字看護大学 名誉教授)

2021 (令和3) 年度	フロンティアセミナー/認定看護師のためのスキルアップセミナー【合同開催】			
	10月24日(日) 9:30～15:30 web開催 ライブ配信	看護を語る ～日々の看護実践を ことばに載せて～	<講演> ”語れる”環境が看護を変える	筒井真優美 (日本赤十字看護大学 名誉教授)
			<研究セミナー> 「ナラティブ」—語りを研究する—	鷹田佳典(日本赤十字看護大学さいたま看護学部講師)
		<シンポジウム> 日々の看護実践をこ とばに載せる	がん薬物療法のその後 ～チームで患者 さんの日々を語り合う機会の大切さにつ いて～	吉田久美子 (大和市立病院 がん化学療法 看護認定看護師)
			看護を語らうカンファレンスのありかたを考 える —急性期病院における慢性疾患看 護—	村田 中(武蔵野赤十字病院 慢性疾患看護 専門看護師/糖尿病看護認定看護師)
2022 (令和4) 年度	フロンティアセミナー/認定看護師のためのスキルアップセミナー【合同開催】			
	11月5日(土) 10:30～16:45 web開催 ライブ配信	看護実践をカタチにす る～共有する意味と 方法	<講演> 伝えよう、あなたの看護実践	江本リナ (日本赤十字看護大学教授・小児看護学)
			<研究セミナー> 看護研究を始めるための統計学と疫学	川崎洋平 (日本赤十字看護大学准教授・統計学)
		<シンポジウム> 私たちの看護実践を カタチにして発表する		川原妙子 (東京女子医科大学附属八千代医療センター・慢性呼 吸器疾患看護認定看護師)
				菅野さやか (北里大学病院・新生児集中ケア認定看護師)
				若林留美(東京女子医科大学病院・慢性心不全 看護認定看護師)
2023 (令和5) 年度	2024 (令和6)年 2月24日(土) 13:30～15:30 Web開催 ライブ配信	あるがままのその人 をみる多職種協働 —事例と看護理論を 結びつけながら話し 合おう—	I..事例を振り返る 腹膜透析を導入したA氏への多職種協働 ～グループインタビューを通じた振り返り	<語り手> 前川早智子 (日本赤十字社医療センター看護師) 山田将平 (日本赤十字社医療センター腎臓内科医師) 岡 文恵 (日本赤十字社医療センターメンタルヘルス科医師)
			II.種瀬例と看護理論を結びつける ベナー&ルーベル看護理論と結びつけたA 氏への支援の考察 ～グループインタビューでの語りを読み解 きながら	<解説者> 細野知子 (日本赤十字看護大学准教授 基礎看護学)
			III.総合討論 事例と看護理論を行き来しながら多職種協 働の可能性を議論	

フロンティアセンター年表

西暦	元号	フロンティアセンター	日本赤十字看護大学
			1889（明治22）年～2003（平成15）年 割愛
2004年	平成16年	看護フロンティアセンター構想委員会設置	
2005年	平成17年	看護実践・教育・研究フロンティアセンター設置 川嶋みどり教授、初代センター長就任 グンゼ株式会社との産学共同事業「血行美人」販売開始 「スマトラ沖地震・インド洋津波災害の被災住民の自立を支援する中・長期計画に資する研究」（日本赤十字社との共同事業）～平成19年度まで	日本赤十字武蔵野短期大学と統合。広尾キャンパスと武蔵野キャンパスの2キャンパス体制開始。 広尾キャンパス2号棟完成 樋口康子名誉学長が第40回ナイチンゲール記章を受章。
2006年	平成18年	第1回フロンティアセミナー開始 認定看護師教育課程開講 6月～11月 開講分野：感染管理 皮膚・排泄ケア がん化学療法看護	広尾キャンパス1号棟完成
2007年	平成19年	フロンティアセミナーに対する同窓会からの寄付による助成は、2018（平成30）年度で終了。文言要検討	濱田悦子学長就任 学内LANネットワーク整備される ホームカミング・デー開始 学生による授業評価、本格導入となる 川嶋みどり名誉教授が第41回ナイチンゲール記章受章

2008年	平成20年		スウェーデン赤十字大学と看護教育及び研究・開発の協力促進に関する協定を締結 スウェーデン赤十字大学との交換留学生制度開始
2009年	平成21年	認定看護師のためのスキルアップセミナー開催開始	
2010年	平成22年	認定看護師教育課程を広尾キャンパスから武蔵野キャンパスに移し開講	武蔵野キャンパスでの大学教育終了
2011年	平成23年	認定看護師教育課程に新たに【糖尿病看護、認知症看護、慢性呼吸器疾患看護】の3コースを開講。感染管理と併せて4コース開講 認定看護師教育課程 皮膚・排泄ケア、がん化学療法看護 休講東日本大震災支援並びに調査活動 日本赤十字 6 大学陸前高田看護ケアプロジェクト実施	高田早苗学長就任 学校法人日本赤十字学園運営の日本赤十字国際人道研究センターが設置される
2012年	平成24年	福島県浪江町支援（なみえプロジェクト）開始 ～2021（令和3）年度で活動終了	
2013年	平成25年		タイ赤十字看護大学と看護教育及び研究にかかる交流・協力に関する協定締結。
2014年	平成26年	地域社会連携ポリシー策定 認定看護師教育課程を閉講する 修了者数866名	チェラロンコン大学、ラ・ソース大学と看護教育および研究・開発促進に関する協定を結ぶ。

2015 年	平成27 年	「看護実践・教育・研究フロンティアセン ター」を「地域連携・フロンティアセン ター」に改編 実習指導者研修会がフロンティアセン ター事業に加わる	開学125周年 国際交流センター、研究推 進センター、入試・広報セ ンター、地域連携・フロン ティアセンター設置 フィリピン大学と看護教 育および研究・開発の協力 促進に関する協定締結。
2016 年	平成28 年	熊本地震災害支援活動	大学開設30周年 カンボジア健康科学大学 と看護教育及び研究・開発 の協力促進に関する協定 締結。
2017 年	平成29 年		
2018 年	平成30 年	和歌山県湯浅町及び早稲田大学人間科学 学院と教育・研究・学生交流に関する協 定を結ぶ。(和歌山県湯浅町学校防災プロ ジェクト-2021年度)	セントアンソニー看護大 学と教育・看護研究におむ る相互協力促進に関する 協定締結。 グランバレー州立大学カ ーフホフ看護学部と国際 化・文化交流推進に関する 協定締結。
2019 年	平成31 年 令和元 年		守田美奈子学長就任 聖心女子大学と連携・協力 に関する基本協定を結ぶ。
2020 年	令和2 年	新型コロナウイルス感染症流行により、対 面で開催していた事業活動は、開催中止。 認定看護師のためのスキルアップセミナー、フロンティアセミナーは、WEB開催ラ イブ配信で行う。	さいたま看護学部開設入 学式をリモートで挙行新 型コロナウイルス感染症 拡大防止のため4月全面休 講。5月から全授業リモ ート実施

2021 年	令和3 年	コロナ禍のためセミナー、公開講座対面開催は、WEBにて開催する 福島県浪江町支援（なみえプロジェクト）活動終了	大学院看護学研究科博士後期課程共同災害看護学専攻の学生募集を停止。 （後続プログラムとして5大学災害看護コンソーシアムとして発展的に継承） 大学院看護学研究科修士課程看護学専攻の入学定員を30名から32名に増員する。 附属災害救研究所を設置する。
2022 年	令和4 年		
2023 年	令和5 年		
2024 年	令和6 年	フロンティアセンター設立20周年	

Ⅱ. 目的と運営

1. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンターは、日本赤十字看護大学が、これまでの知的・実践的な活動をもとに、人々に求められる看護を追究し、開かれた大学をめざして 2005（平成 17）年 8 月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターを前身としている。

斬新な発想で創造的な活動を行う必要があるという認識のもとにスタートし、10 年目を迎えた 2015（平成 27）年度には地域連携の推進をその活動の中心的役割を担うことを目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新たに出発した。

2017（平成 29）年度に地域連携委員会とフロンティアセンター運営委員会が統合され、地域連携・フロンティアセンター運営委員会という組織に、同時に本学の地域社会連携ポリシーは地域社会連携、産官学連携が強調された組織、機能に改正した。

2020（令和 2）年度、さいたま看護学部開学と共に、さいたま地域連携・フロンティアセンター運営委員会が組織された。また、2023（令和 5）年度から、地域連携・フロンティアセンター運営委員会をフロンティアセンター会議とし、各部門で行っていた活動を委員会活動として行うことに組織を改正した。

本センターは、建学の精神である人道に基づき、地域住民の健康と福祉に資することを目的に、以下の機能を果たすこととする。

- （1）多様化する地域社会の中で、求められるニーズに対応しつつ、新しい看護活動の実践を推進する。
- （2）看護実践の研究活動を通し、その知見を学内外に発信する。
- （3）看護大学としての教育機能を、国内外の社会に貢献する資源として活用する。
- （4）開かれたフロンティアセンターとして、臨床看護実践者をはじめ学外の研究者等と協働する場を提供する。

2. 組織運営（図1）

地域連携・フロンティアセンターは、地域連携委員会、継続教育・実践研究委員会、さいたま地域連携委員会の 3 つの委員会において、事業活動を推進している。

地域連携委員会は、「地域社会の文化向上に資する講座」、「卒業生・修了生関連」、「地域防災」、「地域連携」を柱に公開講座、ホームカミング・デー、日赤広尾地域防災プロジェクト、武蔵野地域防災活動、日赤出張暮らしの保健室の各活動を。また、継続教育・実践研究委員会は、実習指導者研修会、フロンティアセミナー、赤十字リサーチ・フェスタの活動をそれぞれ展開している。

さいたま地域連携委員会は、外部連携担当は公開講座や UR 都市機構との協働事業、学生部会の発足により包括支援センター主催事業でのボランティア活動を行っている。内部連携担当は、FD・SD 部会と協働して研修の開催、人材リソースの活用として先生マルシェと称してホームページにコンテンツ掲載をする準備を進めている。

地域連携・フロンティアセンター会議は、2023（令和 5）年度は 3 回開催し、各事業の内容について共有、検証し、改善計画を提言した。

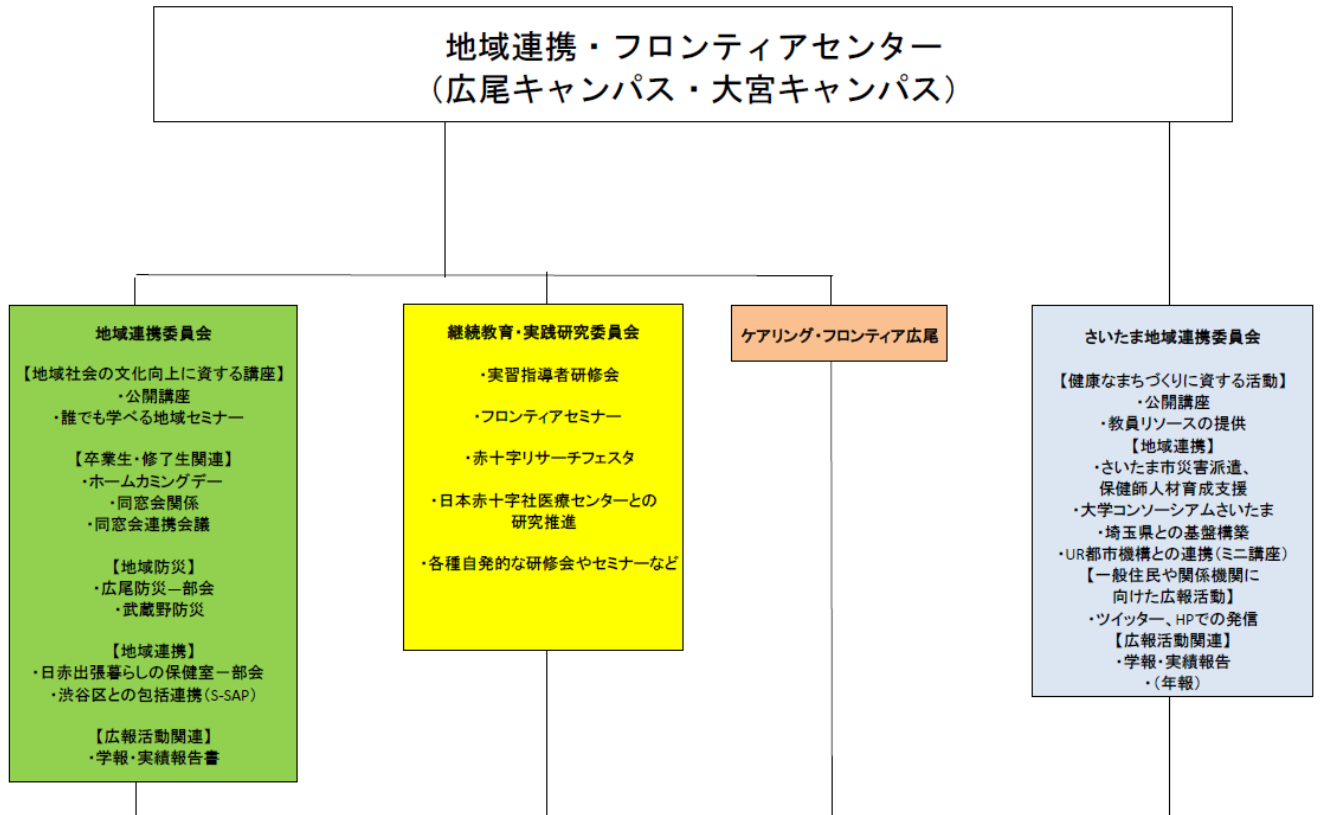
各事業実施にあたっては、学内の教職員、学部生の災害救護ボランティアサークル（SKV）や大学院学生をはじめ、これまでの事業に参加いただいている方や本学大学院修了生など幅広い力を得て運営している。

2013（平成 25）年度に開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院、日本赤十字社幹部看護師研修センターと協働の、独立した組織として各プロジェクトの進捗を共有している。

【図 1】

2024(令和6)年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター組織図

2024年4月1日



Ⅱ. 事業

1. 地域連携委員会

1) 公開講座 / 誰でも学べる地域セミナー

a. 趣旨

地域住民の方々の健康や豊かな生活の創造に向けて、ニーズに合わせた、講義や演習などのプログラムを提供する。

今年度は「自分らしく最期まで生きる」～これからの人生を考えよう～が年間のテーマであった。

b. 活動内容

今年度は2回開催した。概要は以下のとおりである。

1回目

日時：2024年10月5日（土）11時～12時

場所：202 講義室

講師：実践女子大学 人間社会学部人間社会学科 教授 原田謙先生

テーマ：人生100年時代のライフスタイル 家族と地域から考える

参加者概要

- ・人数：12名（男性5名、女性7名）（事前申し込み。；19名）
- ・年齢層 60歳代～70歳代

実施概要

今年度を通したテーマ「自分らしく最期まで生きる」～これからの人生を考えよう！～に照らし、今回は社会学の先生をお招きしてご講義をいただいた。

内容は、時代の流れとともに変わる高齢者像といったことを始めとして、近年取り上げられるようになったエイジズム（年齢差別）や、世代間・地域間に横たわる問題―つながりとしがらみについて具体的なデータや親しみやすい例などを示しつつ説明して下さった。さらにそれらの現状があるなかでも、プロダクティブ・エイジング、つまり、社会のなかで今の自分自身が果たす/果たしうる役割に焦点をあてていくといった考え方も紹介された。最後には高名なピアニストの例で、高齢になったときに若いころとはまた違った追及の仕方、自らの表現について深め続けられたことをご紹介くださった。質問の時間では、社会のなかでの世代間の認識のずれはどうしたら埋まっていくのかといったことで対話がなされた。

全体を通して、とても軽快で明るく、難しい内容をとても分かりやすく現状に即して講義して下さったと感じた。参加者の方々は、うなずいたり笑ったりしながら、参加してくださっていた。



2 回目

日時：2024 年 11 月 2 日（土）11 時～12 時

場所：多目的演習室

講師：日本赤十字看護大学 白井美穂先生

参加者概要

- ・人数：13 名（男性 2 名、女性 11 名）※初めての参加者 6 名
- ・年齢：60 歳代～70 歳代

実施概要

2 回目は、本学の白井美穂先生にご担当いただいた。内容は、20 分程度の講義のあと、40 分程度からだを動かすエクササイズといった構成であった。

からだを動かすことが大事であるということを、専門的なデータをもとに説明された。エクササイズは、ペットボトルを使いながら、座ってできる運動やヨガを取りいれて行われた。

参加者アンケートには、「無理なく穏やかな動きでよかった」「しなやかヨガは心身共に柔らかくなりまたやってみたい」「講座とともに体を動かせたこと（がよかった）会を重ねて参加したい」といった声がよせられた。

本学の公開講座に参加される方にとって、わかりやすい講義と何かしらのエクササイズの組み合わせは、とてもニーズに合ったものだったと考えられた。

今年度の結果からみると、来年度は今回のような講座を、2回シリーズで白井先生にご担当いただくと、ニーズに合ったものになるのではないかと考える。



c. 来年度の課題と展望

来年度の目標は、今年度の活動の振り返りを踏まえ、以下の2つとした。①リピーターの参加者のニーズに寄り添ったプログラムの検討、②新たな参加者を増やすこと、である。

①については、今年度の実施後のアンケートから、白井先生の講演のような形式だと満足度が高いことが推察された。さらにシリーズ化すると内容も明確になり、参加の動機付けにもつながることが期待される。②については、新たな周知場所の検討を行う（例えば本学近隣で導入実習Ⅰをお願いしている施設にちらしの掲示をお願いするなど）。

今後の展望としては、リピーターの方々を大事にしつつ、長く継続することが重要と考える。加えて幅広い年齢層の方々に貢献できる公開講座にしていくことが望まれる。

2) ホームカミング・デー

a. 趣旨

本学卒業生・修了生を対象として交流の場や学びの機会を提供することを目的として年1回開催する。

b. 活動内容

本年度は本学大学院修士課程がCNS（専門看護師）教育を開始して20年の節目の年であった。現在、大学院教育において8つの専攻分野のCNS教育が展開されており、本学の課程を修了した多数のCNSが、様々なフィールドで活躍している。これを踏まえ、本年度のホームカミング・デーは「CNS（専門看護師）って何？—専門看護師教育20年のこれまで、そしてこれから…—」をテーマに据え、講義、実践報告、参加者とのフリーディスカッションからなるプログラムを9月28日に開催した。講師ならびに実践報告者は以下の通りである。実践報告者は全て本学においてCNS教育を受けた大学院修了生である。

◆プログラム

- ・講義「本学におけるCNS教育課程」：本庄恵子研究科長
- ・講義「再考・CNSという資格制度」：武井麻子名誉教授
- ・実践報告 伊藤麻紀さん、岩崎美和さん、大津絵美子さん

当日は、フロンティアセミナーとの協賛企画として本学卒業生、修了生以外の外部者も参加可能とし、本学大学院のCNS教育の広報活動を行うことも目指した。当日の参加者は30名であった。

CNSとして活動していく上での工夫や苦労、やりがいなどが具体的に語られ、CNSを目指している卒業生たちにとって刺激的な時間となったほか、CNSとして活躍している参加者は自身の専攻分野以外のCNSと交流する場となり、参加者は有意義な一時を過ごすことができた。





c. 来年度の課題と展望

例年、様々な切り口でのプログラムを企画し開催しているが、卒業生・修了生の興味・関心を引き寄せることはできず、参加者数は伸び悩んでいる。広尾キャンパスにおいては卒業生が謝恩会を実施しないなど、大学に対する帰属意識が低くなっている現状もあり、本事業を継続、発展させていくためには、同窓会や在学生を巻き込んでいく運営、企画を考えていくことが必要と思われる。また、過去の動向からセミナー形式よりも、パーティー形式の交流会の参加者数が多いことがうかがわれるため、来年度はパーティー形式の交流会を開催し、参加人数に変動を検証し、再来年度以降の企画・開催の参考資料となるようにしていきたい。

3). 日赤広尾地域防災プロジェクト

a. 趣旨

プロジェクトの目標は、広尾地区の日赤 6 施設（看護大・医療センター・総合福祉センター・乳児院・助産師学校・幹部看護師研修センター）の連携と各施設の防災機能強化と人材育成、災害時のスムーズな連携を目的とする。さらに行政・医師会・住民組織等を巻き込み、広尾地区における防災連携範囲を広げることである。

b. 活動内容

(1) プロジェクトメンバー 日本赤十字看護大学（〇織方・河田・西田志・矢野）；日本赤十字社（武口・秦）；日本赤十字社医療センター（丸山・鷺坂・浅野・松浦・三浦・高木・長谷川）；総合福祉センター（乾・清水）；乳児院（山田・張）；日本赤十字社幹部看護師研修センター（佐々木）；日本赤十字社助産師学校（近藤）・渋谷区医師会（高橋）；渋谷区（加藤）；オブザーバー日本赤十字社東京都支部（本多・生形）；の 23 名で活動を行った。助産師学校の参加が再開された。

(2) 活動内容

①子ども食堂出張防災講座（6回）

2022 年度に活動を開始し 3 年目となり軌道に乗ってきた。メンバーが本学災害救護ボランティアサークルの学生、大学院生と共に、渋谷区内の子ども食堂に伺い、「新聞紙で作るスリッパ、ごみ箱」「非常食のローリングストック」「ぼうさいすごろく」「ぼうさいまちがいさがし きけんはっけん!」「防災クイズ（箱開け型）」等のテーマで 6 回の出張防災講座を実施し親子 20 名（感染予防のため各回 5 名までに参加人数制限中）が参加した。子ども食堂運営の地域住民からは「子どもと保護者が防災を楽しく学べてよかった」との感想が聞かれた。次年度からは調理と飲食も再開検討中であり、コミュニケーションと地域のつながりの強化が期待される。

②渋谷区防災キャラバン出展（1回）

11/9 に医療センター・日赤本社・本学院生が中心となり出展した。ブースでは、救護服体験・車両展示、乳幼児の心肺蘇生体験、ローリングストック、クイズに答えてカップ麺をもらおう！、ハザードマップと防災クイズ を実施した。参加者は 950 名程度で、クイズブースには 700 名ほどの来場があった。

③6施設の連携体制検討（5回）

5 回開催し、受援支援体制マッピング等のテーマで広尾地域の災害時連携体制を見直した。

c. 来年度の課題と展望

今後も地域防災活動を継続する。広尾地域 6 施設の連携も進める。

- ・子ども食堂へのお出張講座も住民との連携を継続する。
- ・防災キャラバンも継続、医療センター・看護大学だけでなく他のプロジェクトメンバーの動員を増やし、相談活動などにも対応できるようにする。
- ・メンバーの所属施設の防災訓練等に参加し、各施設を知ることから始め、顔の見える関係作り、連携の糸口を探る。
- ・地域防災の具体的な取り組みを進めるため、渋谷区、渋谷区氷川地区出張所との連携を強化する。

4) 武蔵野地域防災活動

a. 趣旨

【武蔵野地域防災セミナー】

武蔵野市防災課、武蔵野市民防災協会、武蔵野市民防災活動グループ（COSMOS）、および本学（災害看護 CNS 課程学生等、学部学生災害救護ボランティアサークル（SKV）、教職員が共同してセミナーを企画運営し、武蔵野市民を主な対象として、市民防災力の向上を目指している。

【武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）】

武蔵野市の医師会、歯科医師会、薬剤師会、助産師会等と3つの病院、防災課および本学が参加し、緊急医療救護所、緊急医療救護所活動、医療連携訓練、感染対策などの検討を目的に活動している。

b. 活動内容

【武蔵野地域防災セミナー】

セミナーに関して、4月から1回/月の会議(18-19時)を12回行い討議した。避難所・避難生活をメインテーマに、武蔵野市民報(9月号)で広報をして参加者募集した。セミナーは5回実施し、延べ181名参加した。アンケートにより実施を評価し、参加者からは、毎回おおむね満足との回答を得た。

・第1回：10/12/10-12時「在宅避難を考える」をテーマに武蔵野市防災課、武蔵野市民防災協会が主で企画し、本学からはSKV8名、大学院生3名、教職員2名が運営に加わった。参加者44名であった。

・第2回：10/27/13-15時半、本学主催「令和6年能登半島地震における避難所での生活とその支援」をテーマに、被災地よりゲストスピーカーを1名招き講話を行った。本学災害看護大学院生2名も支援経験を話し、SKV6名、大学院生他2名、教職員3名が運営に加わった。参加者27名であった。

・第3回：12/7/13-15時半「エコに美味しく食べよう備蓄食！」をテーマに、本学災害看護大学院生が主で企画し、SKV6名、大学院生4名、教職員4名が運営に加わった。参加者32名であった。

・第4回：1/11/13-15時半「災害時に困ること（災害ゴミのはなし）」をテーマにCOSMOSが企画し、ゲストスピーカー3名を招いて講話を行った。本学からはSKV6名、大学院生3名が運営に加わった。参加者44名であった。

・第5回：2/15/13-16時「避難生活を生き抜く」をテーマに、COSMOSが企画し、SKV7名、大学院生3名、教職員2名が運営に加わった。参加者34名であった。

【武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）】

10月20日（日）8～12時、医療救護所を武蔵野赤十字病院に設置し、医療救護本部との通信訓練及び寸劇方式によるトリアージおよび、傷病者受け入れ訓練を実施した。本学からはSKV18名、災害看護大学院生3名、教員1名が参加した。

c. 来年度の課題と展望

【武蔵野地域防災セミナー】

5月から会議開始し、10月から1回/月程度で、5回のセミナーを実施する予定。アンケートに、演習や参加型のセミナー要望が多く、より住民参加型にすること、そして、対象を絞った出前講義も考えること等を次年度は検討する。

【武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）】

次年度もSKVと共に参加し、医療救護について検討する機会とする。

5) 日赤出張暮らしの保健室

a. 趣旨

大学として地域住民の方々のウェルネスに関する支援を行う。

- ・地域住民の気軽な健康相談及び健康増進活動への動機付けの機会
- ・健康教育や交流を通して、住民だけでなく介護者及び支援者支援の場

b. 活動内容

プロジェクトメンバー：日本赤十字看護大学（石田・佐藤）

地域住民の方々、行政の方々とともに 2 回/年程度で始めた「日赤出張暮らしの保健室」であったが、昨年度から大学院生の力も借りて 4 回/年の開催することができている。場所は大学から徒歩圏内の都営住宅の集会室であった。

今年度の学び合いテーマは以下のテーマでいずれも好評であった。

第 1 回 2024 年 6 月 20 日（木）看護管理学 大学院生

テーマ：「脱水症・熱中症を予防しよう」参加者：21 名

第 2 回 2024 年 10 月 17 日（木）看護管理学 大学院生

テーマ：「お口のケアを見直そう」参加者：18 名

第 3 回 2024 年 12 月 19 日（木）地域看護学領域 大学院生

テーマ：「冬の健康力アップセミナー」参加者：15 名

第 4 回 2025 年 3 月 11 日（火）樋口准教授

テーマ：「あなたにある癒しのちから」参加者：4 名

【学び合いセミナー】を開催後、【健康相談】を実施し、血圧測定やフ手のマッサージ等を行う中で、自然と健康に関する困り事に関する相談があった。主な参加者は都営住宅の住民の方々であった。リピーターも多く健康への意識が高い方がいらっしゃり、本事業で学んだことをもとにご友人の方に健康に関する声掛けをしている場合が多い。そのため、ご自身の健康の維持・増進だけでなく、ご近所の方やお知り合いの方への健康支援のポイント等を含めた内容で実施している。

c. 来年度の課題と展望

- ・自治会や民生委員、地域包括支援センター、社会福祉協議会の方々とともに緩やかながら、しっかりとつながりが深まっている。このつながりを大事にしながら、来年度も年 4 回の開催を目指す。
- ・参加の動機付けとして、他者からの声かけが非常に大きな要因となっており、ポスターや回覧板から情報を拾える人は一部に留まるとの指摘があった。誘い合いを促すためにも、参加者が誰かを誘いたくなるようなアプローチを続けていく必要がある。
- ・本活動は、学生にとっても学びの場となることが分かってきたので、学生も巻き込んでいく方向で検討する。
- ・本学の地域への貢献を外部にもアピールすることを意識して広報する。

2. 継続教育・実践研究委員会

1) 実習指導者研修会

a. 趣旨

実習指導者研修会は、日本赤十字看護大学（広尾キャンパス）と日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、東京かつしか母子医療センター、横浜市立みなと赤十字病院が共同で企画・運営している。赤十字施設には、看護師養成の長い歴史があり、教育と臨床が共に協力し連携して、後輩を育てる姿勢がある。看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげられるように、実習指導者を育成すること等を目的にした研修会である。赤十字施設以外の看護学実習を受け入れている医療機関等の方も参加可能であり、各講義単位での受講も可能な公開講義を設けている。

b. 活動内容

本研修会は、本センターの継続教育・実践研究委員会に位置付く実習指導者研修会部会を構成する教職員 8 名（学内企画委員）が中心となり、学外企画委員として日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する看護職者（各施設 1 名、合計 5 名）と協働し、初めて WEB での研修会を開催した。

2024 年度は学内会議を 4 回、学内外の委員による企画会議を 3 回開催の上、研修会の準備を行い、対面開催 2 回、WEB 開催 2 回で研修会を行った。

開催期間は 6 月～1 月とし、開催回数は 4 回、研修会の構成は実習指導に関する理論・演習・リフレクションとした（詳細は別紙参照）。学内演習の見学などのオプションは、後期の学内演習の公開を再開した。成人看護学領域の「モニター心電図・12 誘導心電図」の演習に 1 名が参加した。また、大森赤十字病院では、研修生 6 名が、実際の実習指導の見学を行い、学びを深めた。研修生のモチベーション維持と研修成果の確認を目的とし、リフレクションシートの提出は引き続き行い、各赤十字施設の担当者にも内容を共有した。

全ての公開講義は、実習委員会の FD として位置づけ、川上先生の「発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導」については、障がい学生支援委員会の共催 FD として開催した。

研修会の修了要件は全体の 3/4 の出席を条件であり、最終的な修了生は 73 名（赤十字施設 67 名、その他施設 6 名）であった。公開講義（FD 除く）の参加者数は学外 35 名、学内（大学院生 62 名、教職員 24 名）であった。研修生へのアンケート結果からも、プログラム内容（とてもよかった 25 名（42%）、よかった 33 名（56%））、プログラム回数（ちょうどよい（95%））、開催方法（対面と WEB）についても、よとてもよかった・よかったとした人が 85%であったため、適切な回数・方法、かつ有意義な内容の研修会であったことが伺えた。

c. 来年度の課題と展望

WEB 開催における研修生からの通信環境やトラブルは殆どなかった。WEB 開催時の出席確認を Zoom のログや目視で行っているが、画面 off の場合、本当に参加しているかが確認できないこともあり、出席管理・確認の適切性は次年度以降の検討課題である。臨床現場は多忙であることもあり、次年度も WEB と対面それぞれのメリットを組み合わせた開催とする。現場の忙しさを反映してか、後期の演習見学の参加者が少ない状況があった。また、講義を担当する先生方が、学部・大学院の新カリキュラムに伴い、オンタイムで講義頂くことが難しくなっているため、事前録画した講義を活用せざる得ない状況もある。なるべくオンタイムで講義を聞きたいという要望もあるが、講義の一部は e-learning にすることも検討し、研修会の継続性についても議論しながら、将来的な方向性も検討していく。さらに、より研修生が実習指導のスキルを身につけられるように、各赤十字施設での実習指導場面の見学を再開する方向で検討する。

今年度、講義の順序性について意見を頂き、次年度は「教育原理」の講義を第 1 回の研修会にプログラ

ムし、実施することとした。今後も、アンケートからのご意見も参考にし、より有意義な研修会になるように努める。

2024 年度 実習指導者研修会プログラム

開催月日	時間	プログラムの内容	講師
2024 年 6 月 12 日 (水) Web 開催 受付開始: 8 : 30	9:00-9:30	開講式／オリエンテーション	
	9:30-10:30	教育課程と実習の位置づけ	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	実習指導概論 実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法	佐々木幾美先生 本学 教授
	13:00-14:30	リフレクションの概念	西田朋子先生 本学 准教授
	14:40-16:10	教育心理 ー学習者の心理ー 人間の発達、学習過程における心理、学生の特⼒	遠藤公久先生 本学 客員教授
	16:20-16:50	オリエンテーション	
8 月 8 日 (木) 対面開催 受付開始: 8 : 30 ガイダンス 8 : 50	9:00-10:30	実習指導の計画①	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	対人関係論	鷹野朋実先生 本学 教授
	13:00-14:30	教育方法 ー状況に埋め込まれた学習ー 状況的学習論、正統的周辺参加論	有元典文先生 横浜国立大学 教授
	14:40-16:10	実習指導の計画② Group Work にて、教育カリキュラムと実習の位置づけを検討し、 実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
	16:20-16:40	オリエンテーション	
8 月～12 月	実習指導に関する実習（実習指導案を用いた展開・自施設での実習指導場面の見学等）		
11 月 25 日 (月) Web 開催 受付開始: 8 : 30 ガイダンス 8 : 50	9:00-10:30	看護理論 看護の概念、看護の知と実習指導	川原由佳里先生 本学 教授
	10:40-12:10	実習指導のリフレクション Group Work にて、実習指導についての振り返りを共有する	企画委員 実習担当教員
	13:00-14:30	発達障害及びその特⼒をもつ看護学生の理解と実習指導	川上ちひろ先生 岐阜大学 准教授
	14:40-16:10	医療・看護の動向と実習	安部陽子先生 本学 教授
	16:20-16:40	オリエンテーション	
2025 年 1 月 27 日 (月) 対面開催	9:00-10:30	教育原理 ー教育原理と実習指導ー 教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観	渋谷真樹先生 本学 教授
	10:40-12:10	看護倫理 ー実習指導を通して伝える看護ー（録画配信） 看護と倫理、実習指導と倫理	吉田みつ子先生 本学 教授

受付開始: 8:30 ガイダンス 8:50	13:00-15:00	実習指導の体験を語り合う：全体のまとめから課題への具体的チャレンジ Group Work にて、立案した実習指導案を用いて振り返りを行い、実際の実習指導で得た学びを深める 実習指導体験の共有、学びや課題の深化、具体的チャレンジに関するディスカッション
	15:30-16:00	修了式・閉講式

全4回の研修会の概要とアンケート結果

■第1回:2024年6月12日(水)

開校式、オリエンテーションに続き、①教育課程と実習の位置づけ ①実習指導概論 ③リフレクションの概念、④教育心理についての講義が行われた。

①教育過程と実習の位置づけ：本学が教育理念と教育目標をもとに、講義・演習・実習の有機的な結びつきに取り組んでいること、各学年で体験する実習での反応そして実習指導者と大学教員の連携の重要性について説明した。アンケート結果でもとてもよかった41%、よかった58%であった。学年や実習によって学生の特徴や求められることが違うこと、指導者と教員の役割が理解できたなどの感想があった。

②実習指導概論：授業としての実習の意義は、講義や演習で学んだ理論・技術を個々の対象に応用し、学びを統合する場となり、実習を通して、看護に対する関心や対象を理解することを学び、自らの成長を促進する学習の場である。実践を通じて経験を積む中で、自己の看護観を培い、学生はこれを4年間かけて、らせん状に学習を積み上げていく。実習指導者としての役割は、実習環境の調整を行い学生が患者に対し安全に実践できるようにする。学生を理解し臨床における役割モデルとなり、助言や時には発問をし、学生に気づきを与えることとなる。それを教員と協働して学生の学びをサポートしていくことが重要である。講義後の質問では、学生へ調べてきて欲しいことをどこまでの範囲や量が適切かとの質問や、患者さんと関わるのが消極的な学生への対応の仕方などが挙がった。また、学生時代を思い出して、初心にかえり実習指導をしていきたいとの意見もあった。アンケート結果は、とても良かった49%、良かった47%であった。事例が多く、実習指導のイメージが膨らみ、今後の指導に役立つと感じた意見が多く出ていた。

③リフレクションの概念：リフレクションとは「事実の意味を伝えること」であり、訓練が必要な事でもある。そして、リフレクションは「問題解決」をすることではなく、「そこで何が起こったか」「どう考えたか」の思考を整理するプロセスであり、感情への気づきからスタートし、結果としてももの見方や考え方に対する変化をもたらすものである。学生指導においては、学生が感じた素朴な疑問や感情を大切に、取り上げることが必要である。また、リフレクションのプロセスには学習者のオープンさや意欲、積極性が大切であり、他者からの批判的意見に対して受け止める能力を獲得していくことも可能である。リフレクションを行うプロセスで、学生が語ることに、「こう言いたいのかな」と察することができる指導者が多いが、語ることを育てるという意味で5W1Hで具体的に質問し、語るための環境を整えることがスキルとして求められる。そして、リフレクティブサイクルを回して行動への変化を気づかせる働きかけをすることが重要である。その中で、学生が指導者からのフィードバックや問いかけに恐怖感や緊張感を抱きやすいといわれているため、指導側の態度として、傾聴し、否定しないことや、アイコンタクトをとる、うなずく、沈黙に耐えること、そして承認することを心がけることが大切である。アンケート結果は、とても良かった39%、良かった55%であった。

④教育心理：人間の発達、学習過程における心理についてご講義いただいた。「青年期の特徴」として自尊感情の低さ、孤独感、傷つきやすさの特徴をもっていること、発達障害は一人の個性として捉えることやできる面に着目する関わり方を学んだ。また、「学習意欲」では、外発的動機づけから内発的動機付けへ高めていくのに必要なこととして、周囲のサポートや達成感を感じ、自分らしくいられることが重要で

あることを学習した。講義を通して、学生との関わり方を考える機会となった。教育は単に教えるのではなく、内発的なものであり、学ぶことが楽しいと学生が感じる事が重要であると学んだ。講義では伝えたい内容のボリュームが多くて時間が不足した感があった。アンケート結果は、とても良かった 30%、良かった 63%であった。

■第2回:2023年8月8日(木)

8月8日の2回目の研修会は、①実習指導の計画①、②対人関係論、③教育方法、④実習指導の計画と実習指導の内容で、対面で行われた。

①実習指導の計画①: 実習指導者の役割、実習要項の役割、実践場面の教材化について知識を得て、実習指導案の実際として計画立案を行えるよう学んだ。実習指導者の役割では先輩のケアをみる、モデルにするモデリングと学生が整理できるように支援するファシリテーターについてそのプロセスやスキルの講義を受けた。今の学生の傾向を踏まえながら最後の合意形成までファシリテータースキルを活用し支援する方法に興味深く受講していた。実習要項の役割では、その目的や目標を理解することでどんな看護師、助産師になってほしいかがみえてくると確認した。実践場面の教材化では、患者との関わり方ややりとりを教材として切り取り、学生の考えを共有、その行為の意図を言語化していくといった学生との対話により教材化し展開する方法について学んだ。アンケート結果は、とても良かった 30%、良かった 58%であった。

②対人関係論: 対人関係論は、実習指導の基本原則とプロセスレコードがなぜ必要かという講義内容であった。臨地実習は学生が対人関係を学ぶ場であり、コミュニケーションでのつまずき、失敗から学生は学ぶ。そのため、実習指導者は自らのケアの根拠など言語化し、学生に伝えることの重要性を学んだ。学生の言動にも彼らなりの意味があることを理解し、実習指導における共有の姿勢やアサーティブコミュニケーションの必要性が理解できた。また、看護の現場は自己一致を妨げられがちだが、自己が感じていることに注目することで、自己理解、他者理解を可能にし、適切なケアにつながる。プロセスレコードを活用することで、未解決な課題が掘り起こされ、時間的経過に沿って再現することで文脈を読みとる力や対象者のニーズを見極める応答能力を高めることができる。一方で、実習指導者もプロセスレコードを読み解くことが必要である。プロセスレコードを読むことで学生の困りごとがみえ、実習指導者として適切な助言・指導につながることを学んだ。アンケート結果は、とても良かった 37%、良かった 56%であった。

③教育方法: 対人関係支援職である看護師は人との関わりを運任せにするのではなく、いいことはやめないことや「思い通りにならなくても思い通り」であることを体験的に学習する機会となった。学習者の立場での体験をすることで、実習指導者は何を与えているのかを学習するねらいがあった。ゲームを取り入れながら、思い通りにならないことや普通であることの大変さを学習した。研修生からは「発言すると変に思われなにかと心配している自分に気づいた」「一体感を持てた」「学生が質問できない気持ちがわかった」という反応があった。安全・安心な場づくりが重要であり、場があれば対人関係はできるものという先生からの教えがあった。研修生が徐々に発言が増え、積極的に参加している様子から自分が普通でいられることや場をつくることの重要性を体感する機会となった。アンケート結果でもとても良かった 71%、よかった 26%であった。

④実習指導の計画②: 成人、老年、母性、小児、精神各グループに分かれて指導案の作成を行った。開始時間と共にメンバー同士の話し合いが始まり、事例から週案か日案にするか、どの課題を行うか活発な発言が聞かれた。他のグループも、活発な意見交換する声が聞かれた。指導案を作成するにあたっては、どうしても自身が看護師であるため看護師目線で病態や治療、ケアに目が向いてしまう傾向があったが、助言を行うことで実習の指導者であり学生の学びや、気づきを得るためにどうすればよいか考えることが出来ていた。実習目的・目標と指導計画とを行き来しながら研修で学んだことを活かしながらグループワークする姿がみられた。アンケート結果は、とても良かった 48%、よかった 26%、どちらでもない 3%であった。交流を交えて、今後の実習指導案の作成に向けて、準備できた様子であった。

■第3回:2024年11月25日(月)

11月28日は①看護理論、②実習指導のリフレクション、③発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習、④医療・看護の動向と実習の構成でWEB開催で行った。

①看護理論：護を展開していく上で、単なる科学技術の応用ではなく、学生には看護観を持つことが必要となる。そして、学生自身が、自分がやっていることの「看護ケアとしての意味」がわかることが大切である。そのために実習指導者は意図的に考える機会を与え、学生が自ら実習において判断し行ってきたことが「看護そして意味のある事」だったと気が付くことが重要となる。それは学生が自分を認めるプロセスになり、看護への探求を深めることにつながるからである。また、看護理論の役割には、「地図」「視座」「価値」の3つがあり、看護の現象を照らし出し、解釈し、正しく善いことであると示すものである。学生が自らのケアや行為に対し、臨床場面での経験を通し、看護理論と結びつけることで、意味付けをしたり、価値を見出だすことで学習が深まっていく。それを実習指導者が理解し関わることで、看護観が育まれていくものであり、看護理論は看護教育を含め、看護の中核に位置するものである。アンケート結果は、とても良かった44%、良かった52%であった。

②実習指導のリフレクション：はじめに今回の目的を共有し、グループワークのため各自ブレイクアウトルームに分かれて話し合いを行った。グループワークでは、司会者、タイムキーパーを決め、事前に自施設で実施した実習指導展開の中で経験した指導場面を、講義で学んだ内容と結びつけながらひとりひとり発表し、共有できていた。実習生と関わった研修生はその体験を、関わらなかった研修生は後輩指導での体験を語ることで、自分の思いに気づくことができたり、自分では気づけなかった体験の意味づけを行うことができていた。看護技術や患者との関わりについて指導するだけでなく、相手の背景を考慮し、まずは自分たち指導者との関係をよくする声かけや場の作り方が大切であることに気づき、具体的な関わり方について講義内容を振り返り話し合うことができていた。アンケート結果は、とても良かった63%、良かった34%であった。

③発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導：はじめに発達障害及びその特性について説明があり、発達障害には、様々な神経発達症群があるが、障害特性に適した方法や教育的支援・配慮が必要であることがわかった。教育的支援の流れを理解し、対応が難しい学習者の問題、課題、対応方法を明確にし、丁寧な支援計画に沿った介入が重要であることを学んだ。発達障害がある学生は、統合して解釈することが苦手なことが多く、医療者との困り感のズレも生じやすい。そのため、教育者側は、障害特性の理解や学び環境の整備を行い、学習者も、医療者として質が保証される能力が習得することが必要である。発達障害がある看護学生の支援のために、法律を遵守しながら、その人に合ったキャリア支援を行い、様々な部門とシームレスな支援・連携ができるよう早期介入の重要性を知ることができた。アンケート結果は、とても良かった38%、良かった47%であった。

④医療・看護の動向と実習：1 社会保障制度、2 看護基礎教育、3 実習指導の構成で講義を行った。社会保障制度改革の歴史から近年の課題について、日常の業務と国の政策がどのように結びついているのかを知るきっかけとなった。日本の病床数は他国より多いが1床あたりの看護師数が少ない現状がある。国の社会保障制度改革では看護職員の養成・確保に関する事業が行われていることや看護大学におけるカリキュラムや実習の在り方など将来の日本の課題を解決するために取り組んでいる。また、実習現場では実習施設の確保が困難であることや臨床指導者が指導に専念できないなどの課題や学生の経済問題などにも触れ、実習指導者は実習環境を整えるだけでなく、学生一人一人の背景などを教員と共有しながら指導を行っていくことの必要性を実感した。社会保障制度というと難しい内容であるが、明瞭な語り口でわかりやすく講義されていた。アンケート結果は、とても良かった38%、良かった45%であった。

■第4回:2025年1月27日(月)

1月31日は、①教育原理、②看護倫理、③実習指導の体験を語り合うの講義、演習を企画し、研修会の最終回として閉講式・修了式を行った。

①教育原理：教育とは人間の成長への意図的な働きかけであり、「なんのために教えるのか」という教育目標と、「何を目指して、どのように教えるのか」という教える側の具体的な教育目標が必要である。そ

れを設定した上で、経験主義を中心とした学習を提供することで、学習者自身の「経験を連続的に改造していく過程」となり、それが教育なのである。そこには、経験に意味を与える、価値付ける「コーチ」としての支援が必要であり、その学び自体を「省察的实践」という。そこで大事なものは、教育とは「与える」ものではなく支えたり、動機付けしたりしながら、学習者自身が自立して「なぜ」と問い、探究し、省察していけるように導いていくことである。これら、教育をしていくためには、教育者・指導者自身が省察的である事が重要であり、学習者に期待し、尊重する姿勢をもって自身の指導を入念に準備すること、自身の指導を客観的に洞察することが、充実した教育に繋がることを学んだ。アンケート結果は、とても良かった 61%、よかった 37%であった。「教育原理」の講義は、研修会のはじめにしてほしいという要望があった。

②看護倫理：看護学生が実習の場で直面する倫理問題についてグループワーク、レポートでの事例紹介があり、学生の倫理に対する深い思慮を知ることができた。講義後の実習指導体験の語りの中で、受講生から学生が患者・看護師の言動をよく観察していて、こんなに深く考えているとは思わなかったとの発言が皆から聞かれた。また、学生の思う看護師に対する倫理的問題を受け止めていたが、同時に実習時間外も患者と関わり、看護師としての責任を考えたときに、看護師も様々なジレンマを抱えながら看護をしていることも知ってほしいとの言葉もあった。学生の倫理観について知ること、より倫理的な側面からのアプローチが必要であると、今後の実習指導に繋げることができていた。この講義で受講生は学生の倫理的な思考を知る機会であり有意義な講義であったと考える。アンケート結果は、とてもよかった 47%、よかった 25%であった。「学生の考えや視点、価値観を知ることができてよかった」などの感想があった。

③実習指導の体験を語り合う：実習指導の体験を語り合う演習では、はじめに今回の目標である「グループワークにて、立案した実習指導案を用いた振り返りを行い、実際の実習指導で得た学びを深める」を共有し、各グループに分かれて話し合いを行った。事前の講義で学んだ「経験から学ぶ、経験するだけでなくふりかえりをする、経験に言葉を与える」といった経験学習を意識しながら、自分たちが上手くいった、もしくは上手くいかなかった実習指導の体験を語り合った。今までのグループワークでは、緊張している学生や後輩の背景を考慮し、まずは自分たち指導者との良好な関係を築けるような声かけや場の作り方に配慮するといった支援について語られていた。しかし、今回は実習指導計画を立案し実施することで、より具体的に実践を学習した知識に結びつける、学生が腑に落ちていない様子に気づき一緒に考える、答えを待つなど学生が主体となって学べるような関わりについて語られていた。また、学生との振り返りなどで指導者自身が行ったケアの意味づけがされる、実習指導の体験を語り合い指導の意味づけがされるなど、リフレクションを通して自分たちのケアや指導をリフレクションするという体験もできていた。アンケート結果は、とても良かった 58%、良かった 39%であった。「グループメンバーと学びや失敗を共有し、課題を見出せた」などの感想があった。

2) フロンティアセミナー

a. 趣旨

本部会は、本学の教育的機能を活用した人材育成、病院との協働、臨床実践能力の向上を目指し、タイムリーな配信を行う場と位置付けられている「フロンティアセミナー」の企画、運営を行う。

b. 活動内容

昨年度のフロンティアセミナーでは、臨床の事例を実践者たちのグループインタビューの語りを通じて解釈し、協働実践の理解を深めた。臨床現場で実践に携わる登壇者、参加者からの反応が非常に良かったため、今年度のフロンティアセミナーでも、臨床現場の実践について当事者に語ってもらい、教員がそれを解釈・考察して提示し、登壇者及び参加者との議論の基盤を作ることにした。今年度のフロンティアセミナーの具体的内容は以下の通りである。

テーマ：クリティカルケア看護のチカラ

ー語り合って解きほぐして私たちの言葉にしてみよう

日時：2025 年 2 月 22 日（土）13:30～15:30

開催方法：Zoom ウェビナーによる WEB 開催

参加費：3,000 円

プログラム：Ⅰ.クリティカルケア看護を語り合う～急性・重症患者看護専門看護師によるグループインタビュー

語り手：野口 綾子氏(東京科学大学病院 集中治療部 講師)、西本 佳代氏(国家公務員共済組合連合会 虎の門病院)、佐藤 みえ氏(東邦大学医療センター大森病院/日本赤十字看護大学大学院修了生)

Ⅱ.クリティカルケア看護を解きほぐす～グループインタビュー・データの解釈

解釈：山中 源治（日本赤十字看護大学講師/急性・重症患者看護専門看護師）、細野 知子・守谷 千明・笹川 恵美（フロンティアセミナー部会）

Ⅲ.クリティカルケア看護を見つめなおす～グループインタビュー解釈への応答

Ⅳ.クリティカルケア看護のチカラを言葉にする～研究・教育の立場からの試み

話題提供：三浦 英恵（日本赤十字看護大学教授）

V.クリティカルケア看護のチカラを私たちの言葉にする～総合討議

準備においては、本テーマに造詣の深い教員に協力を依頼し、9月に登壇者たちにグループインタビューを実施、教員側で語りの解釈を深め、登壇者にフィードバックして実践をさらに省察する契機を提供し、当日の発表につなげた。当日は43名の参加があり、最後の総合討議では登壇者と企画者の議論に触発された参加者が多数チャットで質問を寄せた。アンケート回答数は 26名（回答率60%）であり、概ね好評で、自由記述での「机上では得られない実践知の語りが聴けて大変ありがたかった」「看護を言葉にするという興味深い内容で良かった」等のコメントから、実践者が多い参加者層のニーズに見合ったセミナーが開催できたと考える。

c. 来年度の課題と展望

昨年度から続くこの企画運営方法では、大学教員の研究能力を活用して臨床現場の実践を言葉にし、可視化や省察を促すことができている。次年度も同様に企画し、他領域の実践を議論したい。参加者を増やすため参加費を検討したい。

3) 赤十字リサーチ・フェスタ

a. 趣旨

赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指す。

b. 活動内容

令和7年1月29日（水）17時15分～19時15分に赤十字リサーチ・フェスタを開催した。今年度オンライン（ZOOM）と日本赤十字社医療センター内一部対面のハイブリット形式で実施した。プログラムとしては本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加および日本赤十字看護大学教員による6演題の研究発表とミニレクチャー、研究支援体制についての説明などであった。

今年度のミニレクチャーのテーマは「Beyond～日々の看護の疑問を研究へ」で、2023年度より開始している日本赤十字社医療センターと大学との研究推進連携で研究を実施した実際について紹介した。研究チーム代表として山森佳奈子氏、施設内同領域で研究サポートを行った高橋万里氏、大学からの支援者である稲田千晴氏がそれぞれの立場からの活動の流れと実際を紹介した。加えて研究に関する支援を得る方法や進め方なども合わせて紹介した。

当日の参加者は、日本赤十字社医療センター35名、日本赤十字看護大学などから、看護職、教員、大学院生など29名、延べ67名であった。

今回もオンライン中心のため、音声・共有画像のトラブルや参加者同士の交流が難しいという点では課題が残ったが、医療センター内・大学内のそれぞれの拠点で対応し、オンライン発表内容については事前に質問を募集して司会を中心に質疑応答を行うという方法で実施した。一方で、オンライン開催により、勤務後の時間帯、時短勤務や育休中、遠方等の状況にあっても参加が容易となった。

c. 来年度の課題と展望

次年度に向けては、日本赤十字社医療センターと日本赤十字看護大学との研究支援体制の連携の成果を定例として報告すること、参加者の研究への関心が高まるような内容の充実、実施時期と広報の検討などにより、さらに幅広く参加者を得られるようにすることが課題である。

3. さいたま地域連携委員会

1) 大学コンソーシアムさいたま

a. 趣旨

「大学コンソーシアムさいたま」は、さいたま市内の大学相互の自主性を尊重しつつ、大学が有する知的資源を活用した活動を行うとともに、大学相互の連携及び交流と活力ある地域社会の形成及び発展に寄与することを目的として創設されたものである。さいたま看護学部では「大学コンソーシアムさいたま」に令和2年9月に加盟して、リレー講座活動に参加し共通テーマに沿った公開講座を実施している。

b. 活動内容

大学コンソーシアムの総会については、学長及びさいたま看護学部長、次長が参加し、情報交換を続けている。

「大学コンソーシアムさいたま」の活動の一環の、さいたま市民を対象とした加盟大学のリレー講座を実施した。コンソーシアム全体のリレー講座のテーマは、「心と体の健康」と設定され、これを踏まえてさいたま看護学部でのテーマは「キッズ・カレッジ バイキン残っていないかな～看護師さんの手の洗い方を知ろう～」として、本学部の殿城友紀先生を講師に行った。参加者は、さいたま市内在住の親子15組41名（事前申込46組）、学生ボランティアと教職員19名であった。

アンケートからは、「内容が小学生にわかりやすく、実際の手洗いを体験できるので良かった」「感染症対策の掃除のコツがわかった」「学生さんがやさしくて職業に憧れを感じた」などの声があった。実際に手洗いやバイキンシールを用いた楽しい拭き掃除が体験でき、親子で楽しんでいただくことができた。また、写真撮影スポットを設置し、ナース服や赤十字のユニフォームを着て楽しく撮影することができ、本学を保護者世代に知っていただくきっかけになった。

c. 来年度の課題と展望

当大学コンソーシアムには、次年度も継続してリレー講座への参加を申し込み、実施していくこととする。なお「からだの不思議」と「バイキン残っていないかな」を交互に実施する。

2) UR 都市機構との連携

a. 趣旨

UR 都市再生機構は、居住者が安心して暮らせるまちづくりを目指して健康づくりにも力を入れており、本学では令和3年度から UR の団地における健康づくりを連携して取り組んでいる。

b. 活動内容

令和6年度は UR との意見交換をもとに、UR 都市機構との連携イベント「幸せをもたらす笑いと健康で癒しの生活を実現」講座をコンフォール南浦和団地の住民対象に行った。開催は、8月19日（月）10時～12時に同団地内集会室にて行い、参加者数は9名で、うち6名がリピーターであった。

内容は、本学名誉教授の遠藤公久先生によるミニ講和と学生部会メンバーによるレクリエーションであった。レクリエーションは、講和とリンクするような内容となっており（熱中症予防、文字並べゲーム、うちわづくり）、盛況のうちに終了した。（なお同活動については、UR のホームページに活動の様子が掲載された。）アンケートの結果、好評でとても参考になったことやまた次回も参加したいというものであった。

UR と大学との検討会では、今後は住民へのニーズ調査や3年間の取り組みの評価を行う必要性についても意見が出されている。また、開催頻度については持続可能性を第一に考え、年1回の開催で継続していく方向が示されている。

c. 来年度の課題と展望

次年度も継続して UR と連携し健康教育などの実施を通して、地域の健康づくりに貢献する予定である。

3) 埼玉県内における2つの赤十字病院の看護師への研究指導

a. 趣旨

さいたま赤十字病院と深谷赤十字病院からの看護師へ研究指導の要請を受け、令和3年度から教員5－6名が定期的に研究指導を実施している。

b. 活動内容

令和6年度さいたま赤十字病院へ研究指導実績は、指導教員体制3名、研究指導本数24本(ベーシック21本、アドバンス3本)、研究指導5回、講義回数2回、院内発表1回であった。深谷赤十字病院への研究指導実績は、指導教員体制3名、研究指導本数13本、研究指導10回、講義回数3回、院内発表1回であった。次年度も指導の要請があり、研究指導を継続する予定である。

c. 来年度の課題と展望

次年度も指導の要請があり、研究指導を継続する予定である。

4) 学内での活動の推進

a. 趣旨

大学外の地域や組織との連携づくりのために学内の連携体制づくりが重要であると考えて様々な取り組みをしている。

b. 活動内容

- (1) 地域連携活動の外部への発信として、X (旧 twitter) による Daily News の発信をした。「先生マルシェ」について、教員の変更に伴う再調査により担当可能な講演や研修について見直し、大学ホームページに公開をした。
- (2) 看護学部の地域連携フロンティア委員会と協働で、学報「La Luce 6号」を作成した。特集は「羽ばたきのとき！～さいたま看護学部完成年度から未来へ～」とし、卒業生や地域住民に大学について広報を行った。
- (3) さいたま看護学部内各委員会との連携し、大学としての取り組みを継続している。今年度の学生部会の活動は、学生の主体的な活動への取り組みがみられており、大学祭でのさいたま市保健所との性感染症普及啓発活動や、UR 都市機構主催の公開講座では、学生が講師となり、講義とレクリエーションを行った。また、地域の介護施設にボランティア活動に出向いて交流を図っている。

c. 来年度の課題と展望

- (1)、(3) は継続して実施し、さらに活動を推進する。(2) は広報委員会へ移管する。

2024（令和 6）年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター実績報告

作成年月 2025（令和 7）年 5 月

発行 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター

編集 フロンティアセンター 広報

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3

日本赤十字看護大学 企画課企画振興係

電話：03-3409-0924

FAX：03-3409-0589
